

私は、石鹸、アロマキャンドル、ローション、その他クラフトなど手作りの品をこしらえる職人です。

それと、David Fokosというアメリカ人の写真家の日本のエージェントとして、またこれから松原 正武さんという日本人の写真家のアメリカでのエージェントとして活動する予定です。

David Fokosが日本でデビューしましてから4年になりますが、今年は韓国、台湾、パリのフェアに作品が出展される予定です。

私がサンディエゴから一歩も動くことなく、私の思いを受け継いだギャラリストたちが日本国内にとどまらず、デービッドの作品を広めてくれます。

素晴らしい芸術に関することは、これからお話しする職人としての仕事同様、非常に大切にしている仕事です。

私は、デービッドの作品がホスピスや病院、お寺に展示されることをイメージしています。私のこしらえたデービッド・フォコスのオリジナルの香りとともに、人々を癒すイメージが来ています。

また、松原 正武さんの作品もアメリカで力を発揮していくことと思います。

さて、これから私のものづくりに対する姿勢とビジョンについてお話します。

私は美術を学び、アパレルで長く働いた後、日本でホームヘルパーとして働いていました。

まだ、ホームヘルパーの存在が確立していない、12年ほど前のことです。

私の福祉への道は、家政婦紹介所の門をたたくところから始まりました。

アパレルとは、一味も二味も違う高齢者との関わりの中で、言葉では言い表せない数々のことを学びました。

私は福祉への思いを持ったまま、アメリカに渡ってきました。

2001年7月から2年間、シカゴで暮らした後、サンディエゴに来ました。

そこで新しいことに挑戦したくて、趣味でグリセリン石鹸を作り始めたのです。

自分で使ってみると市販の石鹸より手に優しい感じがしました。

高齢者介護ですっかり荒れてしまった手とアメリカの市販の石鹸が肌に合わなかったことでグリセリンの石鹸に魅力を感じ始めました。

自分で気に入ったこともあって、以前介護のお手伝いをさせて頂いた寝たきりのご主人を介護されていた奥様へ贈ってみましたら、とても喜んでいただきました。

介護をする人は常に手を洗っていますから、その奥様も気の毒なほど手が荒れていました。

「手を洗っただけなのに、随分良くなりました。」そう言われて、本当に嬉しかったです。

「実際に介護の現場にいなくても、このようなお手伝いの方法もあるのだなあ。」と大切な何かを見つけた感触がありました。

そして、真剣に石鹼をこしらえよう、と取り組むようになったわけです。

私のこしらえる石鹼は、ゴートミルクグリセリンを使っています。

そのグリセリンに天然の保湿剤のブラウンシュガー、またはホホバオイルを加えて、お客様のお好みに、ターメリック、ローズ・クレイ、自然の恵みであるエッセンシャル・オイルを加えます。

特徴としては、合成界面活性剤を含みませんので、流れていっても自然分解します。

泡切れが良いので、すすぎも早く、節水にも繋がります。

販売するにあたって利益を得ることを一番に考えれば、グリセリンのベースにいろいろなものを混ぜて量を増やして、コストを減らすことを考えますし、自分でサンプルだけ作り、あとは工場生産するという方法もあります。

しかし、私は手作りすることにこだわり、全ての工程をひとりで行います。

注文くださったお客様のことを一心に考え、こしらえます。

よく「他の石鹼と何が違うの？」と聞かれるのですが、「心」が入ってます。と答えます。

作り始めた頃、そういうと笑う方がありました。

でも今は本当にその通りですね、とっていただけます。

有難いことですね、本当に感謝しています。

ホスピスでもアロマキャンドルを取り入れているところがあったり、香りの効能は、近年注目されています。

このソイ・キャンドルは、また独特な魅力を持っています。

私のこしらえるキャンドルの材料は、100%大豆が原料です。

空気洗浄機能に優れていて、火を灯すことで炎のまわりはマイナスイオンでいっぱいになります。

滝の周りや森林浴をしているような状態です。

また、発がん性物質といわれているパラフィンを含みませんので、低温でゆっくり綺麗に溶けていきます。

溶けたワックスには触れることが出来、そのワックスでマッサージすることも出来ます。

温かなローションとして、お使いいただけるんです。

芯は紙で出来ていて、ススガでにくく、芯の先についているこの金具は鉛が含まれていないことを確認して使っています。

ビンの底に残ったワックスは、やわらかいうちに取り去り、土に埋めていただければ自然分解します。

ビンは、食器用洗剤であらっていただければ再利用できます。

これは、2008年5月からある小売店で販売を始めました。

クチコミだけで3ヶ月で175本売れました。

よく売れましたので「ゆかりさん、石鹼やめてキャンドルだけつくればいいのに！そのほうが儲かるじゃない！」といわれました。

でも、私は決してそうは思わなかったです。

なぜか？それは、小さな存在、小さな利益でありながら石鹼のもつ可能性が無限であることを知っているからです。

数年、私の石鹼を愛用くださるお客様は、こういつてくださいます。

「石鹼がなくなると寂しくなる。また、ゆかりさんに会いたくなるので、オーダーしますね。」と。

こういうお客様の心にささえられて、初めて生き残れる職人でいられるのだと、また、生かされているのだと思います。

そういうお客様を裏切るようなものづくりをしてはならないと心に刻んでいます。

昨年は、A g a n a B a b y さんのお店のコマーシャル用に小さな石鹼を
1年間で5000個こしらえました。

ひとりでも、効率よく作業をしていけば5000個作ることができるのだ。と学ぶことが出来ました。
そして、5000個を達成したとき、このエネルギーを私の品を残すために注いでいこう、と真剣に考えました。

もちろん、お一人でも私の品を求める方がある限り、おつくりします。

しかし、自分でこしらえられなくなっても安心して使える石鹼がある状態を作りたいのです。

ひとつの考えは、企業力を借り、ライセンス契約をして、私の監修の元、石鹼をこしらえる。得た収入から、福祉と私の関わる芸術（写真）のために注ぐ、という方法。

もうひとつは、社会に出るには弱い方々の力を借り、私の監修の元、石鹼をこしらえ、売り上げを関る人たちで分け合う、という方法。

その場合に、福祉という言葉で隠れ蓑に一定の誰かだけが徳をするということではなく、関る人全てが真の温かみを石鹼に注げる環境の下で収入を得ることをさします。

いずれにしても、製作は人の手で、そう、機械ではなく人の手で材料の取り寄せから、管理、製作、販売まで丁寧に行います。

例えば自閉症の方々は社会に出るには弱い面をお持ちだといわれています。

しかし、その反面集中力に優れ、ひとつの事柄をとて丁寧に行える方が多いともお聞きしています。

生まれ持った良い面を活かせる場所・・認めてもらえる場所があることは幸せなことだと思います。

そう思いませんか？

私自身、こうしてとても幸せなので、その幸せをシェアしたいと思います。

今、厳しい時代といわれています。

見せかけの豊かさに心を奪われた人間に対して、経済からも、自然からも、「何をすべきか、考えなさい。」と叱られている状態です。

モノをこしらえている職人として、生み出している人間として環境やこれからの社会の動きのお邪魔にならない活動をしなくては・・・と思っています。

ファッション性ではなく、社会性のある癒しの提案をしていきたいと思っています。

私の思いは冷めることのない情熱をもって存在する、ということをつけ加えておきます。

職人、リッチ・ゆかり